

II—6 近代中国人による日本論

(議長 山田慶兒)

巖
安生

発表 嚴安生

「近代中国人による日本論」と言っても、概観という二字をつけたのです。ごく概略的に、ごく初歩的な論議しか、僕にはできません。いくつかの点につきまして、飛び石みたいにとどつていき、それで一つのラインが描けたら満足すべきなものです、それについても不安があります。第一、私は歴史の専門家ではないので、不安が、もう一つは、やはり日本に対している場合の中国人の伝統的な姿勢と、近代以来の事情が両方重なって、どうしても中国人の日本観は精彩さを欠くもの、または我田引水的、一方的なものになりやすい面もあります。ですから、ラインがもし描けたとしてもかなり荒っぽいものになりかねないので、ご指摘とご批判をいただきたいと思えます。

いまから一〇〇年前の黄遵憲が「日本国志」を最初に出版したときに、彼は以下のようにそれまでの中国人の外国認識を振り返って言いました。文章は長いですが、日本につきましては、私（黄）から見れば日本人の知識人はみんな中国の本は読める。中国の事情はわかる。それに対して、中国の士大夫は、好んで故事を談じ、おのれ足れりともっぱら任じて、外事において意を措くをいさぎよしとせず。つまり、日本は一衣帯水の隔たりしかなくもかかわらず、やはり海外の「三神山」と、ずっと前から見続けてきまして、望むべくして即

くべからずと、ずっと見てきました。それは非常に狭いんじゃないかというのが、黄遵憲の反省です。黄遵憲はもちろん反省が非常に精密で、唐の時代は全然ふれてないんですけれども、宋以後はそういう事情になってしまったと言っています。

それは、近代以来の中国人の対外認識の決定的な病因にふれた、的確な指摘だと思います。実際、遣唐使、遣隋使以来、日本人は大勢中国に來たんですけれども、私の調べた限りでは日本へ、勉強はもちろんのこと、観察を目的に來る者さえ一人もいなかったのです。もちろん、鑑真和尚とか、朱舜水とか、そういう人たちはいましたが、最初の目的も違えば、行ったきりで持ち帰るものはないままでした。「漢書」とか、日本の方には資料としてたくさん引用されますけれども、もう一人日本に來た王韜という人は、近代初期に現れた政治評論家の第一人者にあたるが、王韜が言うには、わが中国文士の撰述するところは、上は正史より下は稗官に至るまで、往々にしてこれを語りつまびらかならず、誤謬を重ねつづけてきて、未だに史実に合わない、そういう状態をずっと続けてきました。

もちろん、漢以来の交通史とか、資料は記してあるんですけれども、ほかはみな伝説、異聞などを適当にアレンジして、史書の一節にとどめるという非主体的なかわり方をずっと

続けてまいりまして、明の中期以後、倭寇のことではじめて日本研究専門書が出現しはじめました。それはすべて倭寇対策の急場の間に合わせに、責任ある長官たちが人に編ませたものばかりで、それが出現したこと自体は画期的な意義があるかわりに、やはり古いものを、旧記の寄せ集めの編み方でしかなく、しかものりとはさみの作業の間で多くのまちがひもしてかして、独自の研究とは言えないまま終わりました。それでも明代の倭寇抗戦の必要上、それらの専門書物には2つの特徴がありました。

一つは、語学、日本の言葉に対して、中国人はじめての強い関心を示しました。各研究書に語寄せというものを設けて、日本の言葉を一番多く集めたのは五六種類、一一八六の言葉があつて、常用語ハンドブックみたいなものになりました。その特徴は二つあります。第一に音訳の漢字はほとんど全部寧波方言、寧波のなまりがついていることと、体とか具象的なものに対しては非常に正確であつたことと、もう一つは言葉に非常にいきいきとした語感がときどきついていたということです。こうしたことから見れば、大体当時海上を行ったり来たりしていた中国の商人と日本の商人、ひいては倭寇の捕虜たちに面接調査をたくさん行ったことをうかがうことができます。

もう一つ、倭寇と戦うために倭性論が展開されました。倭

性論はどういうことに対して提出されたかといえますと、敵性論という研究もありました。そのときは、北の満州族は危険な存在になっていました。慶長の役を回想して、ある高官はこう言いました。慶長のときは朝廷の議論は分かれたけれども、一部の人は北の敵に対して守りをかためなければいけないけれども倭寇に対しては大丈夫だと言ったが、それは大まちがいだ。といひますのは、北の敵は、天高く馬肥ゆる秋にしか来ないんですから、その時さえ防ぐことができればそれでよろしいわけです。しかし、倭寇つまり日本人は、一旦上陸してしまえば、遊牧民と違ひまして、生活習慣と風土は慣れるのですから、それこそ危ない。その中で特に指摘されているのは、遊牧民たちは力は非常に強いけれども、秋にしか来ないこと、また馬がないという風土に慣れないうえに、分裂している。しかし、倭寇の場合は、国王がいて勢いがいつもまとまっております、何時でも攻め込んでくることができるから、非常に防ぎにくい。もう一つ、特別に指摘された倭性は、生を軽んじて一切かまわない。つまり日本人は生を軽んじる。そういう点の記述が非常に多かつた。大体倭寇につきまして、たとえば「跳にして善戦し、一日数千里にして、かつ必死の志を備う。敗れても潰走する者、ほとんどあらず」とか、そういう言い方があつた。

明の時代のいろんな民間伝聞を記した筆記体の本が出まし

たが、その中の一つ「野獲編」にはこういう記載もありました。一人の倭寇がその頭を切られたんですけれども、体はまだ奔走して、人をつかまえようとしている。皆は辟易してしまいました。もう一人の倭寇は、頭を切られてなおも、切られた頭が地面をグルグル回って、切れ味のいいことだと名刀をほめました。というふうには、オーバーなところもあるでしょうが、これが大体、海防第一線で倭寇と接した中国人のつかんだ日本人のイメージだったと言えます。

そういうような時代的な緊張がなくなった清の中期までは、逆に日本認識には特別に明のレベルを超えるものはなかったようです。もちろん、清初から寧波あたりから商人が日本へ来て銅をたくさん買ったのです。そのときの銅商、銅を買う商いは、広東の洋商、江蘇省の塩商と同じほど栄えた三大商売だったのです。この商人たちの観察記の一部が残っている。たとえば踏み絵を踏まされたとか、オランダのキャプテンが非常にうらやましかったとか、商館でへんな遊びが多かったとか、日本人とのつきあいが制限されたとか、そういう体験もあったんですけれども、銅商人たちのことわざに「日本好貨ありて、五島過ぎ難し」というのがありました。大体こういう航路で長崎へ来て商売をするんですけれども、過ぎ難い五島列島を過ぎてたどりついた長崎は、彼らにとって主目的地であると同時に日本全体になってしまい、日本は長崎、

薩摩、対馬の三島からなる国だと、この程度の日本認識も行われていた時代です。

次の時代になりますが、一九世紀、七〇年代以後、中国人がたくさん日本に来はじめました。最初はもちろん外交官だったんですが、彼らの目に最初にとまったものは何かといいますと、詩書を焚す、服色を易える、正朔を改むの類です。つまり、詩書などを全部焼いてしまふ。曆を改める。そういうことは、一部の人は明治天皇の改革だと認め、それを戦国時代の趙武靈王の改革、つまり胡服騎射、匈奴の服を着て、馬に乗り、弓などを習う——それにたとえた言い方が、その当時かなり行われました。それはまだ肯定的な部類で、ほとんどの人たちはけしからんと思っていました。つまり、夷夏の大防を厳にする——夷は異民族、夏は中華です——夷夏の大防を厳にするということをも命の綱にしていた彼らにとっては、それがまんでできないことです。

だから、こういうふうには日本のことを書いた人もいた。一七七四年の「日本近事記」という本には、明治天皇が「国中をして西服に改めせしめ、西言を習わせ、焚書変法す。ここにおいて、国を通ずるは不平に感じ、人々乱を思ふ」であるから、清王朝は渡海遠征をして、徳川氏の復権を援助すべしと主張いたしました。

この人たちにとって、日本は当然漢文化圏の属国であり、

文化の礼儀は守らなければいけないという観念が前提になっているために、そういうふうになってしまったのですが、実はこういうふうな前提、つまり同文同種という先入観ほど近代中国人の日本観察を局限したものはないと痛感いたしております。それにつきまして、私はこれを一種の同文がゆえの呪縛と呼んでいるんですが、そのいくつかのパターンをあげてみます。王韜の話にふれましたが、この王韜は、「普仏戦紀」

を書きまして、栗本鋤雲と中村正直たちがそれを読んで非常に感心し、それは今日の魏源だ、いや魏源以上の国際認識を持っているんだ、ということ、日本に呼んだわけです。しかし、この人は日本へ来て三か月滞在したんですけれども、

書いた遊記は近代最初の中日文士の大交流の記録ではあっても、外国研究家王韜という姿はまったくなくなってしまいました。この人は最初はヨーロッパに行つて近代文明の本場を見てあるき、そしてフランスとプロシヤの戦争まで目撃してきたわけですから、あるいは開化初期の日本を別に珍しがったり見ようとは思わなかったのかも知れませんが、とにかく東京に来てみれば毎日お酒と女だったのです。

当時の日本は、中国の古い文士もこういうことはけっこう好きだったんですから、日本という国は新しいものと古いものとが奇妙に混ざり合った国であり、ヨーロッパからきた新しいものはもちろん新鮮には見えましたが、東洋的な世界の

ほうがもっと入りやすかったのです。東西洋遊歴に關しましてはたくさんの遊記などは残っていますけれども、東洋に關しては物見遊山の遊記とひいては漁色タイプの遊記のあったことを認めざるを得ないゆえんです。

もう一つのパターンですが、「同文」の便がある、あると思つたために、日本に来ていながら日本語を勉強しなくてもすむ。明治前から漢文講習あるいは書家として日本に渡つて渡世をしている人たちがかなりいたんですけれども、この人たちは筆談とかで不自由はしなかった。努力して日本語を勉強しようという意識がなかったので、書かなかつたのです。

周作人のあげた葉松石という人がいました。葉松石は、永井荷風は「十九歳のとき」という短編小説の中で回想しておりました。親父の時代からつきあつていて、床の間に葉松石の書が飾つてあつたという回想をしたんです。この人は黄遵憲よりも三年前に日本に来ており、そして前後七年間滞在したのですが、帰つたときの文集にはほとんど日本のことにふれておらず、ただ一人、二人の人名だけしかなくて惜しいことになった、あの人の筆にはもつたないと周作人は言いました。

かと思つと、一方、日本の土地を踏むこともなかつた、日本学習に反対さえした湖南の名儒者、王先謙という人は、日本の本、たとえば頼山陽の本とか大隈重信の「開国五〇年史」

などを参考にして、非常に分厚い「日本源流考」という代表作も出しました。日本にいなから日本を書かない、日本に来もしなかったくせに日本を非常にえらく書いた。この二つは、みんな中国の古い文人の悪い（閉鎖的そして杜撰的）くせが、「同文」の便によって温存され、助長された例だと思えます。それは、中国人の日本認識の上から見れば、まことに不幸なことだと言わざるを得ません。

三番目のパターンは、初期に行った中国人、外交官も普通の文人も留学生も含めて、例外なく真先に「遺老逸民、なお多く、古を重んじ漢学を崇む」という世界に引つ張り込まれてしまいます。毎日のように詩の添削とか、書の揮毫とか、あるいは貸し座敷でのいろんな唱酬とか、接待攻勢は非常にすごかったです。こういう接待攻勢は、漢文人たちにとってはまんざら気持ちの悪いものではなかった。ですから、一方では自然にこういう前期の遺民たちの見方に影響されちゃうんですね。それは、たとえば黄遵憲の書いた「日本国志」も、初期の鹿鳴館などについて書いたところに、かなりこの人たちの嘆きが、筆使いに感じられます。黄がその後、アメリカとイギリス駐在を経て帰った後に「日本雑事詩」の決定版をつくったとき、一五六首だったのを二〇〇首にしてしまった。それはなぜかといいますと、アメリカとイギリスを見たら、逆に日本はいかに東洋にとつて模範であり得たかと

いう認識に立って、いままで行間にまぎっていた悪口、嘆息、不満の声を削除して、かなりの改作と新作を行ったわけです。それは彼自身が「日本雑事詩」の自序の中で認めておったところですが、ほとんどの人にとっては、黄遵憲みたいな見識と謙遜の態度がもしなければ、そのまま開き直りにつながってしまうんです。つまり、日本では漢学がこんなにすたれてしまったか、けしからんと思つて、視察を途中で打ち切った連中もありました。

日清戦争前までの時代で、ただ一人、すべての論者を抜いて卓越していたのは黄遵憲であるの言うまでもありません。彼の「日本国志」と「日本雑事詩」の二つの著作は、それまでの中国人の日本認識をまったく新しい水準まで引き上げて、最初の本格的な日本論たらしめたばかりではなく、今日に至るも、他の追隨を許さないほどの出来映えでした。そのことは私たちの世代にとつて誇りとすべきか、なげくべきでしょうか。それは中国の日本研究の現状についての甘ったるい感傷ではなく、実情なのです。黄遵憲の作は、特に文章ではいまでも彼を超えた人はいないと言つてよい。それは後世の日本文論の大家である周作人も認めたところですよ。

黄遵憲の本は、あまりに内容が膨大ですし、日本人による専門的研究も含めてたくさん出ておりますので、今日はここで省かせていただくことにしますが、彼は後年、戊戌の政変

で失脚したあとに、こういう詩を詠んだ。彼の二つの著作を振り返って、「千秋の鑑を借る吾妻鏡」という句がありました。それはつまり、彼の二作の性格なのです。ここでは詩語の都合上「吾妻鏡」を用いておりますけれども、広く日本の史書を参考にしたという意味で、特に明治以来の歴史の変遷の教訓を彼は参考にして「日本国志」と「日本雑事詩」の二著を出しました。いま日本では「日本雑事詩」は翻訳されていますが、残念なことに詩の注はあまりつけられていません。かなり省かれています。詩の注のところにこそ、さらには「日本国志」に一層彼の著作の経世済民の性格がはっきり出ているのです。その点だけを指摘するにとどめます。

次は、留学生の時代に移ります。その前に、一九世紀の末ごろに中国には変法維新の気運とともに日本ブームが巻き起こりました。ブームの形成には、張之洞を代表とする開明派の実力者があずかって力がりましたが、変法自強の Handbookとして、はっきりと日本学習、日本研究を鼓吹した梁啓超を挙げなければいけません。もちろん梁啓超の先生、康有為は、一八七〇年代から、つまり琉球事件以来、日本のことに非常に関心を寄せていました。二〇年間ずつと観察を続けまして、戊戌の年があけて春にすぐ光緒帝に彼が進めたものは、自作の「日本明治変政考」と「仏国革命記」、この二つの著作でした。国王が殺されたフランスの革命と、王政復古のできた明

治維新とを二つの正反両面の鏡として光緒帝に提示し、はやく自分から改革を断行しなければ殺されるかもしれないよというような提示をしたわけです。流血変革と、流血しない変革という二つのパターンの例は、梁啓超によってこの世紀のはじめごろまでずつと説き続けられました。

さて、梁啓超につきまして見ますけれども、康有為はあくまで天子さまに意見をする役割に終始したのに対して、梁啓超は、全士大夫階級に対してさかんに説きました。中国の近代啓蒙期における輝かしいスターとして、当時の日本留学生をはじめ一、二世代の中国人に影響いたしました。その思想の内容ばかりでなく「筆端常に情感を帯びる」という梁の名文調は、留学生の雑誌にもよく見られ、大きな影響がありました。

もちろん、梁啓超の言論活動は多岐にわたったものです。一八九八年の冬ごろに日本に亡命してから十年間日本に滞在したために、この間の著作の内容も様々です。日本論についてごく初期的な特徴を二つあげてみれば、一つは彼の日本論はあくまで維新改革の世論づくりであった。ですから、政治性が強く煽動の効果が非常に大きかった一方、不正確さ、我田引水のなところはまたまぬかれませんでした。それは、戊戌政変の直後もあって、亡命初期の梁啓超は、急に外気に触れたカリウムのように、非常に速く過激化しまして、日本

の明治初期のいろいろの例を借りて破壊主義をまず謳歌しました。「日本明治の初期、政府は新たに変わって、国論紛々として伊藤、大隈、井上たちはともに破壊主義または突飛主義を主張する。努めて、数千年の旧物をぶちこわして、急激な手段を取ろうとする。当時彼等は皆東京の築地に住んでいたので、一時は築地が梁山泊と目されていた」、そういうことを非常にうらやましがって、紹介している。それはもちろん、変革の前夜に際して日本の明治前後の激動期にだけ目をつけ、その戦鬪的な雰囲気を利用して、変革を叫び、わが志を研ぐ他山の石としたのはひとり梁啓超だけではありません。

けれども、彼の特徴は、さらに「松陰論」に表れています。吉田松陰の名前は彼の文章に何度も持ち出されまして、テーマそのものにもなっております。つまり、事敗れて亡命中の彼にとつては、松陰のことは他人事ではないように思えたからでしょう。彼は吉田松陰を失敗したがゆえの元勳と規定しました。つまり、吉田先輩がその原因をつくって、明治の諸元勳、伊藤たちがその成果をおさめただけだ、こういうふうに言った。梁啓超は、この人は非常に筆も立つし、頭が非常に早いらしいですね。松陰への凝視から、すぐ中国思想の根底部に疑いの目を向け、まず老子の学は中国を毒害して、いまでもたいへんだと彼は言った。というのは、老子いわく、天下の先を為さず、こういうのが、中国がいまでも進歩でき

ない哲学的な原因であつて、それは松陰を見れば、失敗したからこそ明治維新が成立したのだから、私も失敗しても別に恥ずかしくない、そういう気持ちで言っていたのです。

しかも、現実にこの人は、蔡鍔ら初期留学の秀才たちは全部梁啓超の長沙時代の弟子だったが、それを東京へわざわざ呼んできて牛込区の東五軒町の一室に集め、松下村塾みたいな高等大同学校を開き、自ら吉田晋と名乗るようになりました。梁啓超の別号は吉田晋、中国の晋朝の晋ですね、と別名をつけたほどであります。

もう一つ、梁啓超の日本論の特徴を申し上げますと、清末において一番はつきりと日本学習を唱えたのは梁啓超です。彼は日本の本を読めと論文を書きまして、自分が日本へ来て数か月の間の感激を訴えた。日本の本で非常に役立つ本は数千種類もありますので、翻訳を待つてはいられないですから、皆さん、日本語を学べと呼びかけたのは梁啓超です。なぜかといえますと、日本語は非常に簡単で、数日して小成なり、数月経ずして大成であると、そう言っていた。しかも「日文速読法」をつくりまして、日本語の九〇％は漢字で、ただ何十の助詞などしかないから、それさえマスターして逆に読めば日本文は全部わかる、ということです。

それは非常にお粗末な言い方ではありますが、彼の絶大な影響力のおかげで、三〇年代までの中国人の日本語学習を束

縛した先入観になったと言ってもいい。それは周作人に言わせると、安易な落とし穴を設けたことになりました。

梁啓超は日本学習を非常に唱えましたけれども、一部の人は首をかしげるむきもあったのに対して、こうも言いました。つまり、糟糠にあきあきした人にとって、豚と鳥を食わせるだけで十分に腹ごしらえができるので、海幸山幸などは後でよろしいでしょうと、つまり、日本はあくまで腹ごしらえです。こういう日本窓口観は、梁啓超が最初提唱したかもしれませんが、それを受け継ぎ、うまく表現できたのは弟子の蔡鍔です。

蔡鍔はこういうふうに言いました。私たちはへりくだって、「下問」しなければいけません。中国は遅れた、ですから「下問」を恥じない、日本にヨーロッパに学習しなければいけない。しかし我々は欧米を農工とし、ものをつくった農民と労働者ですね、日本を商販とする。欧米を農工とし、日本を商販とし、我輩主人は、これを取って用いて、まず近くの需要に間に合わせればそれでよろしい。その後、学界超軼し、文治が日に日に新たになれば、またもう一度創って人に恵んでやろう、というような日本学習の姿勢を規定しました。つまり、近代文明をつくったのは欧米で、日本はこれをおろしてきたんですから、私たちはちよつと失敬いたしましたして、何年か後にまた中国は新しく文明の祖国になります。そういう

姿勢を非常にはっきりと打ち出しましたのは、誇り高い中華文人の日本に対しての基本的なパターンと言えます。

それでも蔡鍔は謙虚なほうで、日本をばかにするというわけじゃなくて、謙虚にいろいろ見ました。彼の日本論の第二の特徴は、近代中国の軍国主義の系譜は、梁啓超、蔡鍔によつてはじまったわけです。軍国主義はいまの字引には載っていません。日本の字引にも載っていない。民が抜けてしまいました。憎むべき軍国主義しか残らないのです。しかしその主張は二〇世紀のはじめごろの中国の若者を激発させるには十分だったようですが、その軍国主義というものがまさにこの日本で実行され成功を収めていると、彼らは見えていたのです。日露戦争のときに中国人留学生は一挙に増えました。日露戦争の前までは一〇〇〇人足らずだったのが、日露戦争の一年間で一万人近くに増えたのは、日露戦争に刺激を受けて学びに来たわけですが、来てみて一様に日本をほめていました。日本がいかに「強兵」や「国民皆兵」に成功し、日本の軍人はいかにすばらしいかと皆言っているのですが、蔡鍔は一九〇二年のとき、まだだれも気がつかないうちから、こう言いました。

日本の帝国干渉の主義、もちろんいまの帝国主義という意味じゃないですが、帝国干渉の主義、恐怖・堅忍の様相を見れば、殆んど五大陸の大戦におもむかざるなく、また東西の

太平洋に臨んで有事たらん日はない、と。つまり、日本は大
陸間の戦争に日に日に進んでいる。そういう「臥薪嘗胆」の
空気にその真意を、彼はまだ開戦論が公然と行われる前から
見て取ったと同時に、日本の軍隊はいまは欧米よりも強いと
論じた。なぜかといいますと、日本はいま国民皆兵体制を実
行しているのですから、国民兵は欧米よりも強くなっている。
ましてや中国の軍隊はとてまかなわぬ。こういうふう論
じ、そしてそこから出発して彼の名著「軍国民篇」を書きま
した。

その「軍国民篇」は梁啓超の主宰した「新民叢報」の創刊
号から四期連載した長大論文で、教育、哲学、いろいろな方
面から日本に比ながら軍国民主義を建造する綱領を提示い
たしました。そして、彼はこう言いました。軍国民をつくる
ためには、国魂を提唱しなければいけない。武士道は日本の
国魂である。日本は武士道のために今日まできたし、明治維
新もそれによって成立できたのだと断じた上で、わが中国に
も新しい国魂をつくらなければいけないと言いました。それ
は非常に単純のように見えても、二〇世紀の、特に一九〇二
年から三年にかけての中国の日本留学生と、留学生を中心と
した中国知識人の間に流行った新しい主張であります。今日
から言えば、国民精神の提唱、ということでしょう。

国を人格視して、魂を民族精神と見る。そういう伝統は屈

原以来の伝統ですし、そのときの浙江省、江蘇省などの日本
留学生の雑誌には「屈原に学んで魂よ帰りたまえと呼ぼう」、
そのようなスローガンがたくさんあります。しかも、当時の
人たちにとって、日本に来てから学んだすべてのものを一緒
くたに醗酵させて、軍国民主義の提唱をいたしました。いい
ますと、たとえばスパルタの国民教育、ビスマルクの鉄血主
義、ナポレオンの欧州征服、マホメットの言葉といわれる「聖
戦に死して天国にのぼれ」等々、そして中国の趙武靈王とか、
古今東西のいろんな武談を一緒くたにして、できるだけ新し
い民族精神をつくろうというような熱意が沸騰していました。

それは蔡鍔が最初に言ったことでした。蔡鍔の「軍国民編」
は詳しくふれる時間がないので省きますが、蔡鍔の第三の特
徴は、日本の民族性に対して関心を持ちはじめたことです。
大体はじめて日本へ来た人たちは、次のように考えた。日本
は小国だった。なぜこういう国が急に興ったのか。そういう
ことに対して共通の驚きと関心を持ちました。まず明治維新
のいろんな措置に目を向けますが、その発展の秘密を日本民
族自身に、日本の民族性、文化史のメカニズムに求めようと
する視点と動きはなかなか出てきませんでした。そんな中で
蔡鍔は、まずこういうところに目を向けて、しかも非常に重
大な問題提起をいたしました。

つまり、欧米との交通は、中国は日本より先、外患の迫る

ことは、中国は日本と同じ、欧米の近代文明に関する翻訳紹介はむしろ中国で先にはじめられたのに、なぜ日本にあんなに影響が強かったのかと問うてみました。それは、簡単なようですけれども、この世紀のはじめのころから中国人の頭の中に長く残った問題であり、ただ後の両国の関係の事情で口には出すことができなかつた。長い間くすぶっていた問題ですが、つい最近（七、八年前からか）新たに提起された時に人々はそれを思想開放後の新しい問題提起だとか言っているほどに、なお新鮮な問題でいるわけです。それはともかく、早くも八〇も年前に、蔡鍔はすでにこういう問題を鋭く提出いたしましたから、おどろくほかありません。

彼はこの問題を提起しまして、二つの方面から解釈しました。一つは、幕府肯定論を展開し、もう一つは日本の民族の特別な性質に解釈を求めようとなりました。日本の民族の性質は、どういう特殊な性質かといえますと、彼は二つの点に注目しました。つまり、ヨーロッパの開化は、その理想は文の伝統、その精神は武の伝統に由来しているけれども、日本は先古時代から文と武は渾然一体になってしまっている、日本民族はそもそも特殊な性質、文武両質を備え持った民族だし、もう一つは、昔から日本人は外国文化を、全部吸収消化してしまふ、そういう伝統があります。和魂漢才の時代を経て、近代以来また和魂洋才を経て、ますますその特殊な性質が鍛

えられ文武両質ともに栄えてきたわけです。

この二つの側面を合わせて、彼はこういう歴史の構図を描きました。つまり、彼の究極的な日本評価です。日本をもつて中国、西洋、インドの三つのえらいものをまぜて、その上に自分の精神を重ねて、常に新しきを出し、自国の制度に合わすよう練り直す。ついに東洋歴史上ただ一つの、よく学び、よく変わる、精進して退かない祖国になったと。彼は中国を文明の祖国と規定したのに対しまして、日本を進取精神の祖国と規定したわけである。それを、もう一人の留学生の言葉で言いますと、日本の精神は西洋の物質によってその能をまっとうし、西洋の物質は日本の精神によってその用をつくせり、と。それは昔の日本論に比べて進歩だと言えるでしょう。日本民族の特殊精神などに関しては、程度はまだ浅いですが、けれども、そういう関心が向いたこと自体は非常に意味があると思います。同時に、留学生つまりエリートของกลุ่มから、日本の民族と風俗などに対する関心もあらわれはじめました。最初に留学に来たときは、まず国を救う道を求めているのに対して、少し余裕ができて、日本の民族特性にも目が向きました。たとえば、桜一つ取ってみても、いままでは大体桜は日本の大和魂とか、武士道とか、こういうふうにおうむ返しだったのが、だんだん中国詩人好みの桃の花と日本の桜の花で、どっちが美人の顔色にぴったりするかとか、比

較論が展開されたり、なぜ日本人が桜の季節になるとあんなに気遣いみたいに酔いしれてしまうのか、そういう島国原住民論も展開されるようになりました。

いろんな試みが出はじめたのはいいことだと認めざるを得ないのですが、その中で最後にあげたいのは、黄遵憲の時代から二〇年ぶりに日本の風俗を詠んだ雑事詩です。もちろん留学生がたくさん書きました。他の文人もたくさん書きましたけれども、物見遊山のものが多く、あるいは中国の文士風なものしかできなかった中で、陳道華という人の書いた「日京竹枝詞」はひじょうによくできました。竹枝詞は唐の劉禹錫のときからはじまったスタイルですから、黄遵憲だって「日本雑事詩」の最後の第二〇〇首のところでちゃんと自分の雑事詩を竹枝詞と規定しておりました。ですから、風俗を詠むものですね。そういうものができまして、それを一つ、二つ見てみます。

黄遵憲が明治維新直後の日本の変革の様子を非常に全面的に描いたのに対しまして、この人はもっぱら新東京のまちの風情を詠んで、細かいところにまで観察が行き届きました。合わせて一〇〇首の詩には、皇居、二重橋、青山、上野などはもちろんふれましたが、たとえば鐘の音に夕日沈む浅草、飯田橋土手の風揚げ、赤坂周辺のはたる狩り、神楽坂の夜、団子坂の菊、今川の小路、吉原大門とか、全部書きました。

彼は毎日東京をグルグル回っていたようで、いろんなところへ行きました。たとえば、まちの風俗は、まず明治維新以来の、新学風景。下田歌子の教え子から、朝生徒になって夜店番をする店屋の娘まで、女子教育の様子を詠んだ。と同時に、新学の頂点の様子もこういうふうにとらえています。一首だけ見ますが、仏界、フランスの仏ですが、仏教の仏もかけてあるのです。「仏界説法今日に劣り、海を航せし人争ってベルリンの花を取り、少年博士ひんがしに帰りし日、高壇に頭をあげあげして国家を説く」。つまり、いまはフランスの説は、わざと仏教の説法という言葉を使ったんですけれども、フランスの民主主義とかそういうものは衰えて、いまは皆ドイツの政治哲学、憲法学を取り入れている。少年の博士たちは皆ドイツへ行つて、ベルリンの花を取って帰って、しかも胸を張り、国家論をぶつ。それはちゃんと自由民権運動から明治憲法以後にかけての政治の流れと消長が詠み込まれているような気がして面白い。

時間がなくて二、三十年代にとばしていきませんが、実際にもいま言ったような趣味は、その後の中国と日本の両国関係の現状下では、ゆっくりと許されるものではなかったのです。日本をたたくなら日本論は書きます。たとえば、周作人は二〇年代までは非常に戦闘的な日本論者だったんですが、三〇年代になって日本の俳諧趣味とかに入ってしまうと、革新文

壇からも疎外されたし、漢奸の道につながってしまったわけです。三〇年代に、新しい問題を提起いたしました北京大学の学長、蔣夢麟という人は、四〇年来、わが国の対日本の態度は、三つの変化を経過したと言いました。甲午戦争、つまり日清戦争以前は軽視、軽く見る。甲午戦争以後は師視、先生とする。二一ヶ条要求以後は仇視、仇敵視。軽視のために日清戦争の失敗があり、師視のために今日の革新運動がありました。しかし、これから仇視が極端になるとまた軽視になってしまひはしないか。もしそうだったらもう一度甲午戦争の前車の轍を踏むかも知れないぞ、と彼は警告しました。この発言がなされたのは、一九三一年の春だったらしいですから、何カ月か後に九・一八事件で彼の予言は不幸にして事実と化してしまいました。その中では中国人のいままでの日本認識の三つのパターン、軽視する、敵視する、そしてこの両極端の間かなり群衆心理的だが、ともかく日本に学ぼうという、この三つのパターンがあげられているが、いま肝心なのはもう一つのパターンが必要だ、と蔣は提起しました。それはつまり、知日です。

時代の要請とも言えるこの問題提起に答えるように現れてきたのは、日本の研究者がよく問題にしている戴季陶の日本論であり、その他の多くの「知日」、日本事情の研究であったわけです。それらは二〇年代からはじまったもので、三つの

グループに分けられます。

一つは、魯迅と周作人たち文学者のグループです。北京大学と「新青年」という雑誌を拠点にした日本留学の文化人のグループ。もう一つのグループは戴季陶、廖仲愷たち、孫文に追随して南のほうで革命奔走を続けている人たちの政治評論家のグループ。三番目のグループは、ちよつと世代が下るが、郭沫若たち次の世代から文学者のグループが三〇年代に日本論の分野で活躍いたしました。この三つのグループで一番先に日本論を書いた人として、戴季陶をあげなければいけないと思います。

戴季陶につきましては、時間が定刻になりましたので、一点だけふれて、あとは質問を受けます。

戴季陶の最初の日本論は、一九二七年、二八年に出されましたけれども、この人の日本論が最初に書かれたのは一九一七年だったのです。いまの日本論の骨格となった部分は一九一九年に書かれました。つまり一〇年前に日本論の骨格ができました。けれども、二七年の政治事情があつて、戴季陶はいままで日本論の上に田中メモランダムを出した田中義一論などを加えて一冊の本にしました。単行本の刊行は日本の大陸政策をあばく必要に答えたので、当時の中国では非常に影響が大きかったが、彼にとつては日本論の生まれてきた過程は一二年間、三つの段階を経たというわけです。二一ヶ条

の後に排日の風潮のあがったときに、彼は日本論を書きはじめ、五四運動の後に彼は日本論の決定版、大體骨格をつくって、政治家になった後、蒋介石のブレンになった後に日本論を正式に出した、その三つの段階がありました。この三つ

の段階で進歩もあれば後退もありますが、このところに来てもう割愛させていただくしかございませんので、次はご質問、ご指摘をお受けたいと思います。

山田 厳先生が言及された本の中で、日本語になっていてすぐ読めるものが二つあります。一つは、リストの一番最初の黄遵憲の「日本雑事詩」です。これは平凡社の東洋文庫の中におさめられています。もう一冊は、一番最後に言及された戴季陶の「日本論」です。

これは社会思想社から出版されております。いずれも外国語で書かれた最も優れた日本論の一つであろうと思います。特に戴季陶の「日本論」は、明治維新をやった日本が第二の明治維新と言うべき孫文の率いる革命をなぜ妨害しつづけるのか。そういう立場から書かれた、我々にとってはたんへん胸の痛い本です。

コメントいただきますのは、厳教授の先生である亜細亜大学の衛藤藩吉教授です。

お願いいたします。

コメント 衛藤藩吉

「男児三日見ざれば、もって刮目して待つべし」という言葉がありますが、厳安生さんは九年前に、東大の研究室で勉強をしておられた。やっぱり厳さん、男児でありまして、九年見ざればびっくりかえってびっくりする。たいへん立派な報告でありました。

厳さんが冒頭にたいへん謙遜な発言をされましたので、最初に賛辞を呈します。

厳先生のご報告について、二点、申し上げます。

第一点は、私ごときのまったく知らない明代倭寇のいろいろな新知識を教えてください。日中関係史を専攻する私としては、「イヤ、えらいこっちゃ。私は一八三〇年代以後の中国の文書についてはかなり詳しいつもりなんですが、さらに二〇〇年ぐらいさかのぼらせなきやいけないんで、いまから勉強し直さなきゃならないのは、つらいな」という気がいたしました。

お話を承っていて、中国人の日本観全体、つまり多数の日本人が漁色大酒であり、詩や古典を喜んだという点で、今日の日本人も似ているなと思いました。

まず、日本人が中国に行つて、漁色大酒をしたことは有名であります。皆さん黙っておりますけれども、戦後でさえも、酒の上での事件がいろいろございました。

詩や古典に執着した。これは幼少のときから漢籍の古典の教養を受けた日本知識人たちは、詩や古典に非常に執着した。たとえば、宇野哲人先生の「支那文明記」には先生の中国旅行の記録が入っておりますが、中国の現状についての分析とか感想とか一切出てこない。ここは孔子さまが足をとどめたところだと言つて感涙を流す。ここは諸葛孔明が戦つたところだと言つては感慨の念を披露する。それだけです。

では、もうちょっと実務的学者ではどうかというと、たとえば竹添

井井は、外交官として中国に駐在したこともあるいわば現実を見なければならぬ人でございますが、彼の旅行記『棧雲峽雨日記』を讀みますと、政治や社会の状況はちつとも出てこない。そして「閑雲野鶴」、「雲流れて、谷深い」そういう漢文調の描写のみであります。

さらに時代が下がると内藤湖南、京都では内藤先生の批判をすることはややタブーに近いのでありますが、破りましょう。内藤先生が五・三十事件の後、若き弟子矢野仁一先生とともに大阪の紡績業界に呼ばれて、座談会に出た記録が残っている。紡績の連中は、現実に上海でストにあっているわけです。日本人も殺されているわけです。だから必死で、現状、そして若い中国の青年層の動向を知ろうとするわけです。老大家内藤先生は何と答えたか。うやうやしく紡績会社の重役が「いまのヤングチャイナと言われている連中にはいかでございましょう」と聞くと、「君たち、あんなものはアメリカかぶれじゃ。ほっとけばよろしい」こうお答えになった。

そして、若き俊才矢野先生がお書きになったものに『動く支那・動かざる支那』がある。動く支那の中に中国共産党の活動は一つも出とらん。いまおっしゃったような日本人の漁色大酒、内藤先生が漁色大酒という意味じゃないですよ。一般に中国人が抱いた、漁色大酒、詩・古典という日本人観と、戦前の日本の知識人の中枢をなした人たちの中国人へのアプローチと、相似性があるということ、これを第一点、申し上げたい。

それに対する例外、つまり黄遵憲を例外とし、周作人を例外となすつたけれども、そういう例外は中国人の中では重く用いられておらんのですよ。日本でも同様真に中国を理解した連中は不過です。たとえば、馬関における平和交渉でみごとな通訳をした男は歴史上名前を残しておらんのです。檜原陳政です。彼は、何如章のお供をして中国に行ったとき、一五歳でした。中国へ留学をして、一〇年

たつて帰ってきた。大蔵省の下っ端の役人長年の中国調査の成果として「禹域通纂」という本を書いた。その冒頭には、「およそ外国を考究する、支那よりかたしはなし」とあります。中国でノミヤシラミヤナンキンムシに苦しめられて生活していた、そういう日本人だからこそ、中国研究の難しさを痛感していた。その檜原は、一通訳にして終わってしまった。そういう意味でも相似性があるということを、私は感じました。

巖先生は、日本に対する中国人の勉強の浅さを、今日はライトモチーフとしてお話になったと思いますが、同時に私は、日本人の現代中国研究にもそういう浅い面があったということを描きたい。

もう一つ、その浅さは、洋務運動者、変法論者、それからさらに革命論者を通じて浅かった。そして、常に彼らが北斗七星のごとくに仰いだものは、彼らというのは中国の開明的知識人ですが、欧米の文化であった。欧米も、アメリカよりもどちらかというとヨーロッパの文化であった。フランス。日本でも、熱狂的なフランス好きのフランス文学の大学の先生なんかは、パリと聞いただけで涙ぐむ人がいますけれども、中国の知識人も何かヨーロッパに特別な感情がある。その文化を手に入れるためには、一番たやすい道は日本を通じる道だ。その考え方は一貫しておつたんです。

巖先生は引用なさらなかったけれども、洋務運動の指導者で、日本にたくさんさんの留学生を奨学金をつけて出したのは張之洞です。張之洞には「勸学篇」という文章があつて、その中に、日本に留学なさい。理由はというと、一番先に費用が安い。その次に、日本に行くこと主な欧米のいい本はみんな翻訳されている。だから日本語を勉強すればいい。その日本語は、いま巖さんが梁啓超の引用をなさつたように、すぐ覚えられる。

うそなんです。本当は日本語ほど難しいものはない。ご覧なさい。ここに來ている外国人だつて、日本語で私たちがべらべらしゃべり

だして、それだけでわかる人は少ないですよ。非常に日本語というのはわかりにくい言葉なのに、文字を見ればわかると中国人は誤解している。本当に誤解している。

逆に、余談を言いますと、日本人はまた同じ漢字を使っているから中国語なんてチョロイと思っている。これが大部分の日本の知識人の考え方であって、それが張之洞以来中国でも張之洞がそうであり、梁啓超がそうであり、そして戴季陶といえどもそうなんですね。

山田 どうもありがとうございます。

ヴィシユワナタン 前のセツシヨンの質問はいまませんけれども、衛藤藩吉先生は私が言おうとしたことをいろいろおっしゃってしまいましたから、それを省きます。衛藤先生のご発言に、昨日のセツシヨンで出たこととたとえばちょっとへんな発言が出ましたけれども、純研究と商売研究ということもおっしゃって、学者ならいい研究をしています。ドイツプリンのもとである国を研究するということはいい研究です。そうすると商売研究は「浅く広く」研究している人をさすわけです。そういう人の認識とか考え方というのはあまり役に立たない。あるいはこれからさせなくてもいいではないかという、いろいろな討論できるものも出しましたが、衛藤先生のご指摘には通訳者は中国の本当の事情を知っていても、どれほど無視されたということが出ました。

私は、衛藤先生もおっしゃったように、報告者がふれたいろいろな文献のことも何も知りませんし、いろいろなことをわからなかったと言わなければなりません。先生がご指摘された日本語がどれほど難しいかということとは、私たちが言ったら不勉強だからそう言っていると思われるから、衛藤先生のような日本人からおっしゃって下さったこともありがたいです。

私には、疑問があるのは、その時代の中国の留学生が日本へ来て、日本からいろいろ学んだということがあるけれども、ご報告の最後の部分で、

戴季陶ほど日本語が上手だった人でも、日本語は割にたやすいと言うのです。その誤解が、どれだけ日中関係を誤解と複雑化させてきたか。ごく最近で言うならば、日中国交正常化後に平和友好条約とこのを結びましたが、そのときの某外務大臣は、落下傘兵の訓練を受けるために旧満州に三か月駐屯していた。それだけでもって「おれはシナは知つてるから、まかせなさい」とこう言っておった。

終わります。

軽視、師視、仇視というパターンは云われました。うちの学生もいま研究しようとしていますが、インドから、日中関係の歴史を見て考えることは、明治時代のとき中国が日本を先生というか、日本から学ぼうとしたこととその後出た時代は日中関係をどれほど乱したかということ。日本人が中国に対して持っていた見方がどのように変わってきたか。それを現代にもつてくると、また私たちは非常に心配しているのは、中国は日本を、仇視という言葉も出しましたが、私が正しい理解したとすると、救うという意味でしょうか。

敵 敵視という意味ですね。

ヴィシユワナタン いま中国が日本から学ぼうとしている、非常にイフォリアが出ていますけれども、これからどのような日中関係になるかということ、私たちは非常に注意深く見ているし、そのへんはご報告者ほどのように見ていらっしゃるか、本当に心配ですね。非常に激しいですから。

衛藤藩吉先生のご発言にも出たように、日本が一応先生になったら他の国に対する態度がどうなるか、それをどう見ているかという、その点の問題がすごく残っているのではないか。ペーパーには、本当にびっくりしましたけれども、最後の部分にはその心配ではなくて、ゴールデン・エイジとおっしゃったことは、私たちが日中関係を理解していることと反対ですから、そのところがわかりにくいところがたくさんあるではないかと思

ます。

以上です。

敵 お答えいたしますが、それは、実はヴィシユワタンさんより私のほうが心配しているのです。中国の日本研究の現状を。私を不慣れた分野に向かわせたのは、こういう心配です。私は、三〇年近く、ずっと日本語ばかり教えてきたのです。つまり、大学を出てすぐ学校の先生になって、ああえおばかり教えて単純な講義でしたが、それでも前の学生からは研究者が出てきたんだけど、いまは日本研究のコースを持つようになりまして、逆についてこないんですね。非常に現金になってしまいました。自分の教え子の悪口は言いたくないんですけども、現実に年々大学院を受ける人は減っているんですね。大卒だったら、どこかの日本合弁会社へいけば先生よりずっといい給料をもらい、そして先生を見舞いにきて、まず一枚名刺を渡して「先生、おごつてやろうか」ということになるんですね。それはそれでしょうがないとしても、研究したらとても勧めると、なによ先生、いまは研究したって何になるのかということになるんですね。研究の分野から見ても、やはり安易さを、時どき感じています。同文同種、一衣帯水、中国に行けば、もし一日に三回宴会があつたら、きっと挨拶に一度か二度、一衣帯水が出てきますが、ほんとうに中身はわかるかどうかですね。一衣帯水だったら問題ないでしょう。しかし、一衣帯水の両国ほど遠い存在はないと、いままでの研究でつくづく感じました。近いようで遠い。隔靴搔痒がずっと続いてまいりました。現在、搔痒もしなくてよろしいんです。かゆくなくて、目がアメリカへいっちゃうのではないでしようか、一般の風潮としては。

さっきのご質問にお答えします。国際関係論の先生がいらっしゃるので偉いことは言いませんけれども、たとえば中国人の日本に学ぶ態度は、この間話を聞いて、インド人の日本に対する感覚はそんなに異質感がなかったそうです。それは、感心いたしました。中国はインドよりもっと日本に近いはずなのに、抵抗感がずっとそのまま残っていたのは、数十年来の被

害加害の関係は別にして、中国は昔先生だったのです。その先生の屈辱は、拭い取れないんです。日露戦争のときは、インド人とかフィンランドまで手放して喜びあつたそうですが、中国人は刺激を受けた一方、屈辱も危惧感も非常に抱きました。くりかえすようですが、同文同種といわれる中国人と日本人は今でも心の中ではお互い馴染めていないかと思ひます。東京にはいま二、三万人の中国人がいるそうですが、多くは日本語はしゃべれない、日本人とほとんどつきあわない、日本を知ろうともしない、というのが、残念ながら現状なんです。二、三〇〇〇名の留学生がまじめに勉強しているようですが、理科系が多いですね。

清末の日本留学時代に話を戻しますと、多い時は、一万人前後来ましたけれども、一九〇六年時点の統計では七〇%が短期留学生でした。短期留学生というのは数ヶ月来て、全部通訳ときの授業を聞いて、講義録を抱え込んで中国へ帰り当時の評価のしかたで言えば、銀メッキして帰る、そしてさつそく官職をくれよ、そういうことだったのが七〇%です。二〇何%は一応日本の中学校に入れた。五、六%は浪人していた。日本の大学に入れたのは一%足らずという数字がありました。それは一番来ていた時期の統計です。あくまで日本で、救国から個人の転進に必要な何かを仕入れをして、中国へ戻る。とはいへ、大挙留日運動の中国近代化初期に及ぼした巨大な影響を否定するわけでは決してない、大きく三つの面すなわち初期留日の三つの主流が挙げられます。日本に学んで中国に近代教育を普及した速成師範組、それが一番人数が多いらしいが、文武両道のもう一端、日露戦争に刺激を受けて、富国強兵の見本として日本を見て帰る士官留学組も多かったです。

もう一つは法政です。一九〇四年に科挙制が停止しました。科挙制が停止しまして、正式に発令されたのは一九〇五年ですけれども、一九〇三年からもう科挙制はやめるといふことで、一九〇四年の最後の科挙制の合格者たちは全部日本に送られてきたんですよ。日本に送られてきて、半年の再教育を、法政大学で受けて、すぐ自分は留学生だ。そのときはちようど

清朝廷が憲政準備を宣言したので、法政の東洋留学は非常に株が上がったんです。

それが新しい科挙と見られた面が、特に一九〇五年以後、非常に強かったです。七年以後は制限されまして、高卒以上でなければ出られない。中国も学校が興って、ある程度の予備教育は国内でしなさい。それが一九〇七年か八年からはじまったんですけれども、やはりだれも聞かない。といひますのは、三〇年代まで日本に来るにはパスポートが要らなかったのです。パスポートが要りませんで、学校の卒業証明書を一つ持ってきて、法政大学も、明治大学も、どこでも取ってくれた。ですから、皆文学の道に入った。文学はごまかしやすいですね。そういう面があったんですよ。

二〇年から三〇年、そういう日本留学政策論争がかなりあったのですが、それでも文学生が圧倒的に多い。短期生が多い。亡命者が多い。物見遊山の人が多い。左翼運動の崩れが多い。そういうのがどうしようもなかったのです。近いから、四〇年までパスポートが要らなかったから。

衛藤 いまおっしゃったことにお答えいたしますと、今度は逆に日本人の中国に対する態度を、私はかねてから、ラブ・ヘイト・シンドローム（愛憎症候群）というふうに説明しております。たとえば服部宇之吉先生という方が三〇〇年前の光彩陸離たる、あるいは一〇〇〇年前の花のような中国思想史、あるいは哲学史、そういうものを見るときは涙を流す。しかし、現実の中国に対しては、道路は汚い。みんな鼻を手でかむということから、ヨーロッパを基準にして汚いということから、軽蔑する。ラブとヘイトが常にアンビバレントになって存在している。

だから、中国が非常に弱くなりますと日本人は中国に対してアロガントになり、アグレッシブになる。威武高になる。中国が非常に強いと思えますと中国に対してたいへん卑屈に、サブミッシブになる。同じ日本人が、どちらの心理が表面に出るかで、平気で変わる。本人も不思議ともはずかしいとも思わずちつとも驚かないで変わる。そういう性向が存在しているということ、私も、たいへん将来を心配しております。

ワキサカ 文学のほうをやっておりますので、今日の話とはちよつと畑違いになるかもしれませんが、中国人の見た日本人の作った漢詩の批評をちよつと聞きたいのです。

巖 そこまで、私は不勉強だったんですが、私の知った限りでは、明治期のものは評価されておりますが、それまでは、格律などの面ではばかにされたようですね。明治時代の漢学者は、高度の成功がありましたね。

衛藤 私は具体的に申します。

夏目漱石に「木屑録」というのがありますが、これはどの中国人の古典学者が読んでも立派な漢文であると申しております。

乃木希典の詩については、意見が分かれております。郭沫若は若いときに乃木將軍の詩を読んでたいへん感銘を受けたということは、記録に残っております。立派な詩だと書き残しております。しかし、普通の中国人の古典学者は、乃木將軍の詩を見ると「ウワー」とか言います。

巖 そういう話に関連しまして、たとえば乃木の詩につきましては、梁啓超は引用して、文章の中になりにふれていきます。乃木詩話みたいなものを扱っておりますけれども、あの人は文学的というよりも宣伝ばかりやっていたですから、詩の中の精神とかを主に注目して、たくさん書いております。

具体的にそんなに覚えてないんですが、郭沫若はあるいは清議報以来の影響を受けていたかと思えます。

金 昨日からこちらのほうで世界の中の日本学というのをテーマにしてお話をなさっている途中で、いろいろと韓国のご話に出ましたので、韓国から来た一人として何かお話をしなければ悪いのじやないかというような圧迫感もございますし、私は、いままですと話題になっていた思想史とか、歴史、こういう方面は、自分の専攻分野ではございませんので、適切な質問になるかどうかわかりませんので、単なるコメントとして受け止めていただきたいと思います。

さつき発表者の話にもありましたし、いまの話にもありましたけれども、

結局日本の今後のアジアとの関係という面から見まして、私たちアジア人は何となく心配だということがあると思うんですね。今後の日本の姿勢でも申しましようか。私、韓国人として申し上げておりますが、さっき文明と文化によるサイクルが繰り返されていたら、発表者がお話なさったと思っておりますが、正直なところ、国策、政策としての日本の政治のあり方は、はたして文化にのっとったことがあったかと、私、疑問に思っております。いつも文明、これは明知的な意味づけにおいての用語として使っておりますが、いつも文明を重視した国策を取っていて、文化という概念がもしも現れたとしたら、それはごく一部の現象であって、いわゆる一部の知識人においての論議の対象とはなつたけれども、はたしてそれが実質的に日本の国策、外国に対する外交とか、そういうところにとのぐらいまで反映されていたか。

たとえば、ほとんどの方々が明治期の一つの良心として引用なされている北村透谷にしても、結局彼は挫折した存在でありまして、実質的な影響力はほとんどないですね。一部の文壇的ギルドとでも申しますか、文学者の中では彼は高く評価されていると思えますけれども、実質的な日本の外交上の政策とか、根本的な姿勢に、はたしてどれぐらゐの影響を与えているのかといえますと、私としてはまったく疑問に思わざるを得ないのです。

たとえば、大逆事件においての良心と呼べる石川啄木にしましても、その事件を取り扱いました一部の作者にしましても、はたしてそれでは、実質的に日本の政治方針にどのぐらゐの影響を与えていたかというのは、私はずっと疑問に思っているのです。

つまり、フランスにおけるドレフユース事件においてのゾラとか、ナチ内閣樹立時のマルローとか、アンドレ・ジイドみたいな人たちの、近くはサルトルでもいいんですが、ああいう知識人のオピニオン・リーダーとしての役割が、日本ではたしてどのぐらゐ実質的に果たされているかということなんです。

さっき山村さんは、美という文化的な基準によって今後一つのアジアとかアジア観というものをつくっていきたいという一つの提案をなさったと思うのですが、はたしてそれを竹下首相が真に受けて、政策に反映するでしょうかということなんです。

韓国は、どっちかというところ、あほらしいといえますか、浪費性の高い名目論にとらわれる弊害がございまして、ずっと昔から、名目論、これが原則に乗っているかどうかというので争ったりして、かなりの浪費をしたり、後退をしたり、そういうことを繰り返しておりましたけれども、とにかく一応知識人たちのオピニオン・リーダーとしての役割は、現在もそうでありますが、ある程度それは果たされていると思うんですね。新聞の論説とか、そういうものによつていいオピニオンが出てくると、それが早速政策に反映されとか、そういう方向に流されていくとかです。

ここに集まっていらいっしやる立派な国際感覚のある方々の意見が、今後の日本の取る態度とか、実質的な政策に反映されるとなると、アジアの、特に韓国人の一人としての私なんかは日本の将来に対して全然心配しないで、安心していられると思うのですが、ただそれが、いままでの日本の歴史にかんがみて、ちょっと心配だという点がございます。

ツルタ 厳先生のご報告、たいへん興味深く聞かせていただきました。実は私、いま日本近代文学に表れた外国人像というものを勉強しておりますが、それはいままでの西洋ないしはフランス、ドイツ、そういう国そのものに對してではなく、むしろ人間に對する日本人の反応といえますか、そういうものを調べております。厳先生の最初のほうにも出てきましたけれども、日本人に對する中国人のイメージとして、首がグルグル回ったかというのを、たいへん面白く聞かせていただきました。

日本の国全体、日本のパワー、文化、そういうものではなくて、直接日本人に對するイメージの変遷を伺いたいです。たとえば日本近代文学に表れた西洋人像というのは、簡単に言っちゃいますと、たいいていの場合モンスターかビューティフル・ゴッデスかどっちかに分かれちゃうんです

ね。人間的な中間があんまりない。どっちかといいますと、人間としてあまり取り扱わない。日本人というものは、物というのは十分に受けとめるんですけれども、実際人間が入ってくると、どうもうまく受け止めることができない。むしろファンタジーにしてしまうところがあるんですけれども、巖先生、いかがでしょうか。中国においては、国というよりは日本人というものに対するイメージ、そういうものにパターンがございませうでしょうか。

巖 ありますね。さっき言った倭性論から、日本人は生を軽んじるとか、武士道とか、しかし日本の武士道を体系的に研究しはじめたのは二〇年代です。いままでは武士道といつたらすぐ腹切りとか、日本刀というふうなイメージになってしまうのです。いまでも、ちよつとけんかにならなかつたら、暴力をふるう方をお前は武士道だとか言っているぐらいで、非常に安易ですよ。つまり、これで日本がわかったということ。日本を体系的に研究したのは、黄遵憲のところ、詳しく深入りできなかったのは惜しかったのですが、それから戴季陶。その間に周作人は主に文化面を研究している。体系的に研究したのは黄遵憲です。それから戴季陶の日本の神道、神権思想とか、日本の民族性の研究ですね。日本の仏教と神道との関係とか、南進政策、北進政策とか、全部ふれて体系化したのは戴季陶です。

もちろん日本の材料も引用したらしいけれども、大体中国の文人が書くときはだれかの引用をあまり書かないですが、そういう体系的な研究はありました。しかし、日本へ来て、日本の実生活の中にあつた日本人像をいろいろイメージ化する試みもなされました。日本人はあまりユーモア感がないとか、日本人は堅苦しいとか、そういうイメージは、一般的にいままで続いているんですけれども、日本人の美しいところについてあまり深く立入り、触れなかつたようです。日本人はある程度純度とか密度の高い社会ですから、特に中国人が入ってくるのを拒んでいる場合がかなりあるんですね。

それに対して、先生の講演は東大で聞かせていただきましたので、

非常に興味を持ったのは、私もいまま少しずつ近代日本文学における中国人像を整理しておりますが、夏目漱石、芥川龍之介とか、谷崎潤一郎とか、本当に面白いですね。たとえば、日本人を見る中国人の目がかなり進んでいたときに、中国人は非常に悪く描かれているんですね。たとえば、芥川龍之介の「舞踏会」から三島由紀夫の「鹿鳴館」まで、大体清国の公使とか外交官が出場させられますが、大体ばかみたいな顔をするんですね。見ちゃいられないようなイメージですけれども、一八八一年の時点で、黄遵憲には非常にすばらしい、そのときは鹿鳴館は霞ヶ関だったかどこかで、または横浜の延賓館の舞踏会の風景を非常に美しく描いていまして、私は日本人も含めほかの人の文章を調べて、あんな躍動的な描写はなかつたんですが、今日は触れることができませんでした。

いつまでも清国人は辮髪を垂らして、めがねをかけて、へんなかつたのでしたが、黄遵憲みたいな立派な大人は日本人の描写の中に出てこなかつたのです。漱石が満韓へ行けば、汚い汚いばかり連発していたんですね。確かに汚いんですけれども、芥川龍之介が上海に上陸してから長沙まではずっと不機嫌だったのです。やつと湖南の激しい気性に接して、ある程度ものが書けるようになったのですが、逆に谷崎潤一郎は中国を耽美派の観点からいろいろ見ている。井上紅梅みたいな人は、南京にいて、毎日中国人の服装をして、戻っても東京のまちを中国の服を着て闊歩したくらいですね。ともかく、へんな趣味が多いようです。いまでも中国古典について、あるいは中国人以上に日本人はたくさん書いている。しかし、中国人をその中に入れると、どうもおかしくなるんですね。人間とつきあうのは、お互い、下手じゃないですかね。

山田 時間がありませんので、もう一分だけ。

梅原 いまの金さんの質問に關してお答えしたいと思いますけれども、これは非常に大事なことで、韓国の知識人と日本の知識人の大きな違いは、韓国の知識人は大体現実に参加するということを知識人の大きな要件にしているんです。ところが日本人の大多数の人間は、現実の政治や経済に近

づくな。そのほうが純粹だという考え方がございます。

我々は、現実の政治や経済に近づきまして、このセンターをつくったわけでございますが、そのセンターをつくる過程で現実近づいただけで、たいへん評判が悪いのです。梅原猛という人間は、たんへん悪い人間だということになったわけでございます。

いまの言葉で言うと、インテリの言葉を日本の政治家が聞けばまだたいへん希望があるということでございますが、このセンターをつくるだけぐらいは聞くだけの姿勢は、まだ日本の政治家は持っているわけでございます。

して、このセンターというものはそのくらいの知性を持っている。それ以上の知性を持っているかどうかは、あやしいのでございます。

そういうことでございます。

山田 今日、ながい時間をかけて解決しなければならない重い問題がたくさん提出されました。

時間がまいりましたので、午前中のセッションはこれで終わりたいと思います。

厳先生、衛藤先生、どうもありがとうございました。